

文化高知

2009年11月 NO.152



「アムステルダム郊外の家」 谷 晃

〈もくじ〉

高い知、高知。大自慢大会。エンジン01がやってくる	高野一郎	2
かまんかまん、何とかなるろう	松岡忠幸	3
「豊永郷文化講座」豊永郷 一文化の来た道	釣井龍秀	4～5
フラメンコのリズムにのせて ～スペイン・グラナダから高知へ	濱田あかり	6～7
出会いの海へ・一冊の本をめぐる③	前田由紀枝	8～9
言葉の現場から18 「木琴」のなぞを読み解く(1)	広井 護	10～11
高知のギャラリー⑭ nBox	都築太郎	12
高知市文化振興事業団 9月～10月の事業から		13
風俗歳時記・風伯		14～15



の存在を知り、入会させていただき

ました。青年会議所は、営利目的の団体でなく、公益性とボランティア精神に則った、ひとづくり・まちづくり活動の団体です。社業の業界では知り合えない素晴らしい仲間、先輩、各関係者と、「明るい豊かな社会」の実現に向けて活動しています。

その中で、今年、「行政・県民市民の皆様と同じベクトル上の対外事業に参画することにより、官民協働を率先し、その中での(社)高知青年会議所のブランディング向上と会員の資質向上、地域活性化」を目的にして活動しております。

本年度の高知は「龍馬伝」土佐・龍馬であい博」等、秋から来年にかけて、高知を全国へ発信伝播していく、またとないチャンスが到来します。二十一世紀のビッグチャンスとも言えます。

その第一弾として、高知青年会議所がお手伝いする、「エンジン01文化戦略会議オープンカレッジ」(十一月二十六日(二十九日)が高知市で開催されます。「エンジン01」とは、各界・各分野の著名人・文化人が、日本文化のさらなる深まりと広がりを目指して集めたボランティア集団です。

「オープンカレッジ」は、将来にわたって展開し得る地域活性プロジェクトをも視野に入れたテーマを掲げ、開催次年度以降も会員と地域の関係性を発展させるなど、単なる一過性のイベントではなく、日本の「知のネットワーク」と地域の結合を目的とした、エンジン01の中でも最大規模のイベントです。百名を超える講師陣が期間中来高され、数万人の一般参加者を対象に、様々な講演・セミナー等を開催します。

現在、このような時だからこそ、「文化」について考え、この「エンジン01」を官民協働で成し得ることにより、県全体の文化レベルの向上をはかり、一騎当千の高知人を作り上げる絶好のチャンスだと感じています。

そのためには、巨大な発信伝播力を持たれているエンジン01講師陣や来高者を、土佐人のホスピタリティでおもてなしし、高知のファン・応援団になっていただき、高知を外に売る、正しく地産外商のツールになるよう、高知県民皆で、「おせっかい・おもてなし」をしていただきたいと思っています。

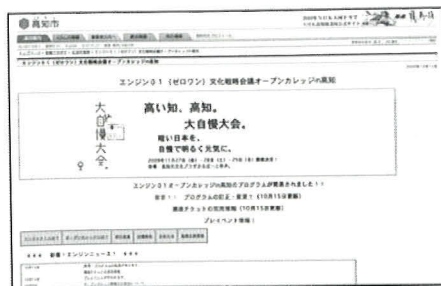
高知の先駆者達は、なに「とも積極的に立ち上がり、活動し、責任を持って時代をリードしてきました。

高知が窮地にある今、一騎当千の真・高知人が活躍する時がやってきます。

誰もが平等に享受することのできる「文化」をおおいに浴びて、世界に羽ばたく真・高知人創造のきっかけとして、「エンジン01文化戦略会議」に参画し、地域を背負える、真の責任世代となり、高知を「日本一の明るく豊かで誇れるまち」にしていきましょう。

ぜひ、皆様、ホスピタリティ精神をお持ちになり、この日本最大の文化の祭典にご参加下さい。

(たかのいちろう/社団法人高知青年会議所理事長)



エンジン01オープンカレッジin高知 公式サイト
http://www.city.kochi.kochi.jp/soshiki/79/enjin01kochi.html

かまんかまん 何とかなるろう

松岡忠幸

「何とかなるろう」

高知で何度も口にした言葉です。NHK高知放送局で三年半担当した、毎週金曜夜に放送されている番組「とさ金」は、生放送がいよいよ三分後に始まるという時になって、番組後半の展開が決まっていな

いなんてことがよくありました。そんな時は「何とかなるろう」とぶつけ本番でやるしかありません。そんな「とさ金」は、高知だからこそ生まれた番組でした。実は、「とさ金」のような二十五分番組を毎週制作しているNHK地方局はほとん

どありません。人数の限られた地方局だと本当にぎりぎりの制作体制になるので、「それは無理だ、止めておこう」となるわけです。しかし、高知という土地の雰囲気「何とかなるろう」と高知局のみんなに言わせれば番組が始まったのです。

漁業が盛んな県だからでしょうか、台風が頻繁にやってくるからでしょうか、「心配していても仕方ないから取りあえずやってみよう」という雰囲気が高知にはあると思います。私はそんな雰囲気が好きです。そんな雰囲気の中でやる「とさ金」が、

大変だったけれども好きでした。「何とかなるろう」の神髄は、高知のあるイベントで学びました。毎年十一月に高知市文化プラザかるぽーとで開催されるまんがの祭典「まんさい」です。

ひとくちに「まんがファン」と言っても、幼児もいれば、中学生もいますし、いわゆるオタクの大人もいて、男女で嗜好も違います。私は五年前にオタクな成人男性の客として参加し、度肝を抜かれました。そのすべての人たちが、みんな一緒に心からまんがを楽しんでいたのです!

通常考えられないことです。幼児と中学生でまんがの趣味はまったく違います。男女でも違います。そのすべてを楽しませようというのは無茶というか、通常はターゲットを絞り込むものです。それを承知で「何とかなるろう」と何も絞り込まずに、つまり諦めず

に突き進み、理屈ではあり得ない大成功を取っていたのです。どうにも説明の難しい、不思議な化学反応を見せられた思いでした。どうしてこんなことができるのか!? 謎を解明すべく、市民有志によって構成される「まんさい」実行委員会メンバーに加わったのです。そこで見たのは、すべてのまんが

ファンに楽しんでもらうための徹底的な工夫とチャレンジの積み重ねでした。たとえば、中学生のコスプレイベントは仲間内だけで楽しむものと相場が決まっていた。しかし、そのコスプレを小さな子どもでも分かるまんがキャラクターに限定するようお願いすれば、みんなが楽しめるイベントになるはずだとアイデアをひねり出し、取りあえずやってみるのです。その結果、「お姉ちゃんかっこいい!」と目を輝かせる子どもたちに囲まれた高校生の笑顔ときたら!

全力を尽くしてなお、理屈だけではたどりつけない境地を諦めないための言葉として「何とかなるろう」を使った時、そこに高知ならではの理屈を超えた大成功が生まれるのです。

「何とかなるろう」は、思考停止でさじをなげる言い訳としても使えない時代だからこそ、高知の「何とかなるろう」が未来を切り開くと私は信じています。

まつおかただゆき/NHK長野放送局アナウンサー



長岡郡大豊町にある山寺「定福寺」
この寺周辺は以前は豊永郷と呼ばれていた



「豊永郷文化講座」

豊永郷—文化の来た道

釣井龍秀

宗教と芸術の根源はひとつ、と言われることがあります。(中略) 人類だけが宗教と芸術を生み出した、とさえ言えるかもしれません。

『芸術人類学』 中沢新一

二 一 万年前の現生人類の遺跡であった熊の儀礼と、多くの地域で残された素晴らしい壁画などの遺跡を見ると、確かに「祈り」と「芸術」は人類が獲得したものと云えるのかもしれない。

このたび定福寺豊永郷民俗資料保存会は、豊永郷文化の保存活動の一環として、先生方の協力のもと「豊永郷文化講座」を開設いたしました。第一回は多摩美術大学准教授・青木淳先生による講演「『笑い地蔵』と豊永郷の文化」、第二回、定福寺僧侶・釣井龍秀「豊永郷 祈りの来た道」、第三回、高知県立歴史民俗資料館館長・宅間一之先生「大賀ハス咲く定福寺」、第四回、定福寺住職・釣井龍宏「豊永郷の民俗と出会い よろこび そして、生命」という内容で

講座名の「豊永郷」は大豊町の徳島県境に隣接した地域です。「豊永」という名前は、現在の熊本県玉名市と関係があるようです。以前玉名市で東豊永という地域を見つけることができました。九州と高知の山間部

が深い係わりを持っていたことは、多くの資料から知ることができます。当機関誌のタイトルは「文化高知」ですが、この「文化」とは何でしょうか？

広義に捉えると政治や経済も文化活動の一つだと思えます。狭義では和歌や短歌、茶道、能や歌舞伎など、多くの日本の伝統文化や芸術がすぐに浮かびます。「文化」について思考してみますと、広義、狭義にかかわらず人間の心が大きく影響していることに気づかされます。狭義においては、日本以外の文化からは短歌や歌舞伎は生まれませんでしたし、日本文化からゴッホやモーツァルトなどは登場しませんでした。つまり、「文化」はその地域に住む人々の「心」の表現方法と捉えることができるの



8月から9月にかけて四回開催された「豊永郷文化講座」では、参加者の熱心な受講風景が見られた



ではないでしょうか。

さらに、「文化」を支える「心」を思考すると、これも各地域の「祈り」と深い関係があると感じます。中世以降の欧米の文学や音楽はキリスト教の影響を受けていないものはないといわれるほどです。また、日本でも能や歌舞伎などの舞の源流をたどれば、そこには「祈り」が登場し、「竹取物語」や「源氏物語」など日本の多くの文学の背景には、本居宣長のいう「もののあわれ」のような、目には見えない何かを感じられます。

この「何か」について元文化庁長官の河合隼雄氏は、日本人の心には「原悲」があると述べておられます。欧米の「原罪」文化では禁忌を犯すと「罪」が与えられます。日本の「原悲」文化では、「鶴の恩返し」のように禁止事項を破ってしまうと「悲しさ・せつなさ」が現わされるといふものです。「もののあわれ」や「原悲」を背景に、日本の社会は思考が展開されてきたということです。

そしてこの「心」に大きな影響を与えたものが「気候風土」だと思います。日本人の繊細な感覚は、日本に四季ができたときとされる一万二千年前から自然のうつろいの中で育まれてきた感覚といわれています。

人類は身体や言葉を使う以外の表現方法を知りません。そして身体と言葉の表現の基になるものが「心」

であり、「心」は各地域の「祈り」や「気候風土」が影響していると感じます。それゆえに、地球上の様々な地域の文化を尊重する重要性があるのではないのでしょうか。決して一つの価値観で統一された文化が正しく、それ以外の文化が野蛮というようなものではないように思います。

日本と世界の多くの文化が異なる

ように、日本でも地域により文化は異なります。高知平野の文化と山間地域の豊永郷文化の違いもその一つです。どちらの文化も自然発生的にある日突然、起こったものではなく、多くの人や物・思考の流れがあり、気候風土にあったものがその土地の文化となったのだらうと思われ

「豊永郷文化」の中でこれまで注

目されていなかったものが、「定福寺豊永郷民俗資料館」に残る民具です。豊永郷の人々が長年使ってきた民具を、定福寺先代住職・釣井義光師が収集を始めました。賛同者の協力を得て約一万点の民具が保存され、内二、五九五点は国から重要な民俗文化財の指定を受けました。四国の山村用具の指定は、豊永郷の民具だけです。

定福寺という山寺は豊永郷の人々の思いもあり、廃寺に追い込まれるほどの廃仏毀釈の影響を免れました。定福寺に安置されている千年以上前の仏さまや多くのものは、豊永郷の人々のお陰で守られたのです。その豊永郷の人々が使ってきた民具の保存活動が、定

福寺豊永郷民俗資料保存会が呼びかけ、始まりました。そしてその活動の一環として、「豊永郷文化講座」を開設したので

民具は、豊永郷という、人が暮らしていくには決して楽ではない環境で、ひたすらに家族を思い、豊作であり収入が得られるようにと願いながら使われたものです。先人たちの手垢や汗が残った、まさしく「祈りの道具」です。この「道具」と「祈り」がなければ、豊永郷の人々や豊永郷の人々に関係するすべての人々が、各地で活躍することがなかったかもしれないのです。

その民具が現在危機的状況にあります。民具を含め多くの山間地域の文化が、人口の減少により消え去ろうとしています。これからも多くの先生方の協力を得て、「豊永郷文化講座」を開催し、豊永郷文化の保存活動を続けていきたいと考えております。また、保存活動をきっかけに、四国の中山間地域を東西につながる道を「文化の来た道」として多くの山間文化をつなぐことができればと考えております。

「祈り」と「芸術」という人類誕生以来の感覚が各地で根付き育まれてきた文化。豊永郷にも人々によって受け継がれてきた素晴らしい文化が多く残っています。

(つるいりゅうしゅう／定福寺僧侶)



大豊町立民俗資料館の多くの収集品のうち、2,595点が国の重要有形民俗文化財に指定された。日本で6点しかないといわれる室町時代のノコギリ2本も含まれている

フラメンコの



リズムにのせて

濱田あかり

～スペイン・グラナダから高知へ

濱田あかりプロフィール
歌の好きな幼少時代を過ごし、2003年カンテ・フラメンコに出会う。上林功に師事。04年渡西。マヌエル・エレディア、センシ・マルトス等にカンテを学ぶ。08年日本フラメンコ協会主催、第17回新人公演カンテ部門で奨励賞を受賞。四国、西日本を中心に活躍中。



フラメンコ…。遠い異国の伝統文化。情熱…バラ…このような言葉が連想されるのではないのでしょうか。
そして、アンダルシア。近藤真彦の「アンダルシアに憧れて」という曲がヒットした時、学生だった私にとつては（世代がバレますが…笑）、勉強嫌いで歴史も地理も苦手だったせいもあり、アンダルシアがスペインにあるということくらいしか知識がなく、どんな魅力があるのかなどまったく知りませんでした。しかし、アンダルシア地方に位置するグラナダの地を踏んだ時、建造物や町並みに魅了され、憧れ得るものがたくさんありすぎるなあと感じたことでした。

が見えなくなるほどの苦しみ表現され、残酷な歌詞も多く出てきます。たとえば、食事に出される肉といえば、精肉されたものが商品としてスーパーに並ぶこの時代、家の裏で豚を殺してそのままキッチンへ…など、考えられないことですが、ジプシー達は家族でその作業をやり、飢えから身を守ってきました。
闘牛、戦争なども歌われています。宗教をめぐる争いは今も絶えない問題ですが、彼らはスペインに住んでいたイスラム教徒をモーロ人と呼び、モーロ人、城壁、攻撃、発砲、爆弾など、歌詞にもよく出てきます。私には想像することしかできません。私が、こうした歴史を持つフラメンコに出会い、正直「えらいものに手を出してしまったな」と思いながら、レトラを書いた人に敬意を表しながら歌っています。キリスト教徒が十字をきるほどの意識には及ばないかもしれませんが、歌う時はいつも、スペイン伝統のものをできるだけ汚さないように心がけています。
私のプロフィールは、「歌の好きな幼少時代を過ごし…」から始まっていますが、歌うことが恥ずかしいという気持ちや邪魔をするまではよく歌っていたようです。その頃は当然今ほど、インターネット、携帯、ゲームなどなく、触れようと思えば、音楽に耳を傾け、野山を駆けめぐり、

私がフラメンコに出会ったのは、二〇〇三年。フラメンコと言えば踊り。鮮やかな衣装を身にまとい、クルクルと舞う。フラメンコ＝舞踊と思われ方が多いかもしれませんが、けれども私の場合は、フラメンコは音楽であり、歌でした。
まず、とてつもなく惹かれたのは、独特のリズム。
「えっ？なんでそんなところで止まるの？」「不思議だけど、わからないけど、なんだか気になる」「上手く言えないけど素敵」「ギターの音色…切なさで胸にジンときてしまう」「日々の生活では耳なれない響き」……
独特のリズムで織りなされるフラメンコは、ひと昔前までは完全にアンダーグラウンドなものでした。現在は、日本はスペインについて世界第二位のフラメンコ人口を誇る国です。踊りの練習生だけでも十万人以上、テレビドラマでもフラメンコ教室に通う主人公が出てきたり、世界遺産を巡るドキュメント番組で取り上げられるなど、広がりを見せています。
そして、高知でも上演された、プロデューサー・阿木耀子さんと音楽監修の宇崎竜童さん、フラメンコ舞踊家・振付家の鍵田真由美さん、佐藤浩希さんの出会いから生まれた「FLAMENCO曾根崎心中」は、フラメンコの本場とも言える、ヘレス



夏は海で泳いで帰ってくる…、そんな暮らしができていました。私を含めその時代の子供達は、心の奥底が、あったかく、目には見えないエネルギーに満ちあふれていたように思います。
いくら文明が進んだとしても、人が生で演奏をしたり、人と人が実際に会って話をしたりすることは決してなくなることはなく、反対に言えば、なくしてはいけなないものだと日々考えます。そんな中で、芸術と呼ばれるものすべてを積極的に支援していきたくて、フラメンコを通じて、次世代に繋がるような活動をしていきたいと考えています。
高知在住の私は、フラメンコ舞踊の伴唱として現在、四国、大阪、岡山、福岡、先日は富山、鳥取などで活動しています。フラメンコショーが数多く行われる東京や大阪に住むことができれば、フリーで全国をまわって…、という方法もあります。しかし、家族がいるとなかなか身軽には活動できません。なにより、少

のフェスティバル参加の快挙を成し遂げ、高い評価を得ました。
高知出身の方では、文化庁芸術祭で優秀賞を受賞された入交恒子さんは有名ですし、宿毛市出身の canta オール（歌い手）・有田圭輔さんもロッカメンコというグループでメジャーデビューを果たしています。
とはいえ、さすがに西郷輝彦のバラをくわえて…というイメージは少なくなってきたものの、まだまだ日本、特に高知では、舞踊音楽としては知られていない分野ではないのでしょうか。

それは無理もなく、フラメンコが伝統芸術として認められたのも近年なのです。から「神の手」と呼ばれるフラメンコギタリストのパコ・デ・ルシアが譜面なしで作曲することは有名ですし、もともと譜面のない音楽であり、ルーツもまだはつきりしていないところがあります。
定住権を持たない、また持てなかったヒターノ（つまりジプシー）がアンダルシア地方に住みつき、虐げられた生活を余儀なくされ、そのあまりの辛さをすこしでも和らげるために歌が生まれ、ギターで演奏されるようになり、最後に踊りが備わったと言われています。
私は舞踊ではなく、歌からフラメンコに惹かれたのですが、その歌詞（レトラと言います）には、神に助けを求めたり、過酷な労働で地平線

しアンダルシアに似た高知が私は好きです。ですから私のフラメンコへの思いを、高知にしながらどのように実現していくのか…課題は山積みです。
私自身の夢は、文化庁が行っている海外芸術家派遣制度に応募しつづけ、スペインでの勉強時間をもって、一生かけても解り得ないフラメンコの神髄に、少しでも近づきたい。
また、今年の十二月十九日には、一緒にグラナダでフラメンコの勉強に励んだにもかかわらず、手の故障のために活動を休止していたフラメンコギタリストの夫と共に、少し大きなイベントを開催します。
高知で現在教室を開いている舞踊家の先生方とうまく協力しあって、その相乗効果でフラメンコの浸透をはかっていくことをコンセプトとし、それに加え、日本各地で活躍しているフラメンコアーティストを可能な限り高知に招くことで、新しい風を取り入れながら企画したものです。
そしてこれからは、さらに拠点を作り、スペイン在住の友人の協力を得て、スペインからの情報も届けていきたいです。
フラメンコを通して、生き生きと暮らせる時代づくりのお手伝いができれば幸いです。
（はまだあかり／カンタオーラ）

今、龍馬が熱い。

高速度の千円効果もあってか高知県立坂本龍馬記念館への入館者は大幅に増えている。ゴールデンならぬシルバークの九月には五月をしのぐ賑わいであった。

もちろん来年放映の大河ドラマの影響はあるのだが、本番は来年である。前哨戦がこれであれば、来年はどうなるのだろう。意外とこのままなのかもしれない、なんていうのは樂觀(悲観)的すぎるのだろうか。

大河ドラマ『龍馬伝』が発表されて以来、圧倒的に盛り上がっている所は、周知のように「長崎」である。発表後「長崎部隊」は一人二人、三人、あるいは「長崎龍馬」と大書した大型バスで、次々と高知にやってきた。あいさつと勉強のためらしい。ハウステンボスの「観光丸」(観光船ではない。幕末の幕府海軍の軍艦を復元したもの)も、長崎龍馬のPRで全国津々浦々を回ったと聞く。彼らが口々に「龍馬伝」が長崎



全国龍馬ファンの集いで講演する『龍馬伝』原作・脚本家の福田靖さん。もう2カ月もすれば「龍馬」は駆け出していく=10月、南国市内のホテルで

出会いの海へ二冊の本をめぐって③

時の人・龍馬

『拝啓龍馬殿』の取材話に戻ろう。昨年一月から二カ月余、私は龍馬へのメッセージを書いてくださった方を各地に訪ねた。

埼玉・熊谷市の上野静香さんという若くて元気なお母さんは、「初めての子どもを授かったとき、私は産もうかどうしようか迷っていました。子どもを産むことで仕事や自分の夢を失くしてしまいそうな不安があったから」と語り始めた。上野さんは真つ先に大好きな桂浜の龍馬に相談に来たという。

大きな龍馬像の後ろ姿を見た瞬間、上野さんは涙が止まらなくなりました。龍馬に一喝され、なんてつまらないことで悩んでいたのかと目が覚めた。



来春建て替えが始まる歌舞伎座。9月公演では市川染五郎さん主演「龍馬がゆく・最後の一日」が熱演された。劇場前では最終公演までのカウントダウンが表示されている=9月、東京・銀座で

生き残り最後のチャンス」だと言う「長崎の今」を、一度自分の目で見てみたいと思っていた矢先、私に長崎訪問の機会がやってきた。八月末、講演会の講師として呼ばれたのである。講演当日は『龍馬伝』主役・福山雅治のコンサートと重なっていた。宿泊先の長崎駅前のビジネスホテルで、いきなり『ようこそ！龍馬の長崎へ』という文字が飛び込んできた。「エッ!?!」という感じである。

大切な命を受け止め、その後幸せな母となった上野さんは「龍馬のお墓は京都だけど、お墓はしんみりする。それよりも桂浜で龍馬と一緒に海を見ると前向きで明るい気持ちになります」と笑っていた。

龍馬台地(銅像のある高台をこう呼ぶ。銅像には地番もあるってご存知?)に立つ龍馬像は、後ろ姿で多くを語っているようだ。人間の真の生きざまは後ろ姿に表れるというが、龍馬像の原作者・本山白雲はどんな思いでこの像を制作したのだろう。

年間三万数千人にもものぼるといふ現代日本の自殺者。『拝啓龍馬殿』を読んでいると、その数字に含まれることを免れた幾人かは、龍馬が救った人だと思えてくる。龍馬があらゆることに生き抜くことの大切さを語りかけているからだ。龍馬、すなわち桂浜に立つ龍馬像にはそれほど大きな力がある。「龍馬像」を「龍馬」そのものとして蘇らせたものは何か。建立者「高知県青年」たちの熱情と行動、宿毛出身の彫刻家・本山白雲の芸術力の共鳴ではないだろうか。

後ろ姿に涙したという上野さんの言葉を、高知にいる私たちはしっかりと受け止めなくてはいけない。

先の大河ドラマ「功名が辻」放映時の高知では、「どうせ高知は最後にはしか出てこんき」という声を聞いたが、長崎は違う。「ドラマで長崎は最後にしか出てこないかもしれない。しかし、最後でも必ず出てくるんですから」という強気。

勾配のきつい坂上の風頭公園に龍馬像があるが、交通手段の少ない像へのアクセス問題は春先に解決策が施された。夏には龍馬のいた「亀山社中」が記念館となつてオープンした。私も四年ぶりに社中を訪ねたが、以前よりも龍馬を体感するにふさわしい場所になっていた。そこで観光客が「龍馬って高知生まれだったの?」とつぶやき、タクシー運転手の誰もが堂々と長崎の龍馬を語る姿に驚いた。福山雅治の故郷凱旋コンサートは長崎市あげてのお祭りだ。龍馬と福山で「長崎の今」は活気と勢いにあふれていた。

翻つて龍馬のひざ下、わが高知。高知にこそ「生き残り」への危機感

前田由紀枝

が必要ではないのか。この温度差は何なのだろう。私は龍馬記念館の人間として、講演で「龍馬は国(藩)や身分を超えた人間。高知だけでなくこうして長崎でもどこでも顕彰してください」とは大いにうれしい」と言いながら、言葉が空回りしているような気がしていた。龍馬ってどこの人だろう。しかし、である。やっぱり龍馬は土佐の男なのだ。



龍馬像の原型。高さ61cmの像に龍馬のやさしさと厳しさがあふれている。昨年80年ぶりに本山家から公開された。高知県立坂本龍馬記念館に展示中



ふわりとした後ろ姿に「龍馬」を感じる

龍馬像は海を眺めながら八十年余、多くの人を叱咤し激励してきた。龍馬像の先にあるのは過去ではない。土佐の海が太平洋へとつながるように、その先は未来である。

山に阻まれた辺境の、海に囲まれた遠流の地、土佐だからこそ、名もない若者たちは新天地をめざして出奔し、やがて魂はこの地に帰ってきた。故郷土佐こそが彼らの安らぎの場所、再生の場所なのだ私は信じている。

故郷は向き合わなければ、近くにあっても遠い。龍馬もまた向き合っ

てこそ身近な人となるのだ。幕末も龍馬もまだまだ近い歴史である。しっかりと向き合えば、龍馬はたしかに愛すべき土佐の男で、私たちの大切な宝物であることに気づくだろう。

異外での取材を重ねる中で、私自身身がそのことに気づいた。そして、『龍馬伝』を機に、もう一度土佐を見つめ直してみるのも面白いなと思っている。

まえだゆきえ／高知県立坂本龍馬記念館



福山雅治20周年記念コンサートの音(おん)返して2万5千人を無料招待したライブ中継会場。8月、長崎県営ビッグNスタジアムで

「木琴」のなぞを読み解く(1)

木琴

金井 直

妹よ

今夜は雨が降っていて
お前の木琴がきけない

お前はいつも大事に木琴をかかえて
学校へ通っていたね

暗い家の中もお前は
木琴といっしょに歌っていたね

そして よくこう言ったね
「早く街に赤や青や黄色の電灯がつく」といいな

あんなにいやがっていた戦争が
お前と木琴を焼いてしまった

妹よ

お前が地上で木琴を鳴らさなくなり
星の中で鳴らし始めてから間もなく
街は明るくなったのだよ

私のほかに誰も知らないけれど

妹よ

今夜は雨が降っていて
お前の木琴がきけない

「木琴」は、胸をうつ詩である。
ところが、授業者にとってはやり
にくい教材でもある。言葉が平易す
ぎて何を教えていいかわからない。
困り果てて教壇で立ちつくしたこ
もある。苦闘のすえに、「言葉の裏
を読む」という授業方法を編み出す
に至った。たとえば、以下のように。
T「第二連に『暗い家』ってあるけど、
どうして家は暗かったの？ 読み
取れることが三つはあるよ。」
P「夜だったから。」
T「一つはそうだね。まだ読める。
夜だって、電灯をつけていれば暗
くないでしょう。」

P「戦争中は、夜は爆撃されないよ
うに、電灯を消していた。」
T「そういうことを何という？」
P「：灯火管制。」
T「そうだね。でも、まだ読める。
内面的にも読めるでしょう。」

P「心が暗かった。」
P「空襲があるかもしれないと思っ
て、家族がみんな不安になってい
た。だから家の中の雰囲気は暗か
った。」

：というふうには、「書かれている
言葉」から「書かれていない内容」
を読み取ってゆく。すると作品を深
く読み解くことができる。そして授
業が成立する。この過程は、推理小
説を読むようにスリリングである。
助言をうまく打てば、生徒たちか
ら多様な読みを引き出すことができ
ることもわかった。

その一例を紹介したい。
T「冒頭の『妹よ』という呼びかけ
には、複数の裏の意味が隠されて

いるよ。みんなは、そのうちいく
つくらい読み取れるかな。ちなみ
に先生は五つ読み取っています。」
P「えーっ！」
T「なるほど。でも、姉かもしれない
よ。」

T「お前」とか『のだよ』と言っ
ているから、兄の可能性が高い。」
T「そうだね。話者は兄だろう。そ
れが第一の読みです。ところで、
『妹よ』という呼びかけを全部『姉
さん』という呼びかけに変えたら、
詩のイメージはかなり変わってく
るね。どう変わる？」

P「姉さんなら妹よりしつかりして
いる感じ。」
P「話者より大人。」

「これは先生の主観的な読みだが
：」と前置きをしながら、以下の仮
説を提示する。

恋人が死んだ夜、詩人は夜空を見
上げたのではないだろうか。空には、
星が光っていた。星のまたたきが、
詩人には木琴の音色のように感じら
れた。死んだ恋人が星の中で木琴を
鳴らしているのだと。そして、この
詩が生まれた。

：そんな想像をすると、「妹よ」
という言葉は、一種の暗号ではない
かという気がしてくる。

「妹」は、古語でいう「妹(いも)」
ではないのか。「恋人」である。
「妹よ」という言葉の背後には、「恋
人よ」という哀切な叫びが隠されて
いるのではないか。

「今夜は雨が降っていて お前の
木琴が聞けない」：とは、いつもは
お前の木琴を聞いているということ
である。「聞こえない」ではなく、「聞
けない」というのは、今夜も聞きた
いというせない願いの表明であ
る。妹への思いというより、恋人へ
の思いと言った方が自然ではないだ
ろうか。

：このように、書かれた言葉から
書かれていない内容を推理してゆ
く。このプロセスこそ、文学作品を
読む醍醐味ではないかと考えてい
る。

(ひろいまもる／土佐中学校教諭)

T「太平洋戦争で妹を失った人はいっ
ぱいいたはずだ。その人たちがこ
の詩を読むと、自分のことを言っ
ているように感じる。そういう表
現だね。：妹を失った人だけじゃ
なく、戦争で肉親を失った多くの
人が、この詩の話者に自分を重ね
て読むことができる。固有名詞で
呼びかけるのと違って、『妹よ』
という呼びかけは、どんなイメー
ジですか。」

P「普遍的。」
P「一般的。」
T「そうだね。それが、第三の読み
です。」

ところで、『妹よ』という呼びか
けからは、その次に語られる話題
が予想できるよ。どんな内容です
か？ 『妹よ、百円貸してくれ。』
ではギャグになるでしょう。」

P「改まった内容。」
P「重大な内容。」
T「そう。『妹よ』という呼びかけは、
これから重大で改まった内容が語
られることを暗示している。兄と
して妹に語る、兄にしか言えない
大事なこと。それがこれから語ら
れることではないかと予感させる
言葉です。これが、第四の読みです。
ところで、女子の中でお兄さんや
お姉さんのいる人は、思い出して
ください。今までに、『妹よ』つ
て大真面目に呼びかけられたこと
ありますか？」

「姉さん」「弟よ」よりも「妹よ」
うな存在。」
P「妹ほどは、かわいそうじゃない。」
T「では、『弟よ』に変えたら？」
P「妹より元氣そうだ。」
P「空襲にあっても、弟だったら、
走って逃げられそう。」
P「やっぱり、妹ほどは、かわいそ
うじゃない。」

「姉さん」「弟よ」よりも「妹よ」
の方が悲劇的なのである。「姉」は
話者よりも年齢が高く、話者を保護
する存在である。「弟」は、一定の
年齢になれば、徴兵の対象となり、
戦闘員になる可能性を持つ。

「姉」や「弟」と比して、「妹」は
戦争に対して、非力で無抵抗な存在
なのだ。
その妹が空襲によって命を落と
す。そういう悲劇的な響きが「妹よ」
という呼びかけにはこめられている
。これが、第二の読みだ。
T「まだまだ読めるよ。」

『火垂るの墓』っていうアニメを
知っているでしょう。あのアニメ
に出てくる、戦争の焼け跡で死ぬ
妹の名前は「節子」です。では、『節
子よ』と固有名詞で呼びかけるの
と『妹よ』と普通名詞で呼びかけ
るのは、どう違う？」

P「『節子』と言ったら、その一人
の妹のイメージしか浮かばないけ
ど、『妹よ』と言ったら、たたくさ
んの妹のイメージが浮かぶ。」

「戦争中は、夜は爆撃されないよ
うに、電灯を消していた。」
T「そういうことを何という？」
P「：灯火管制。」
T「そうだね。でも、まだ読める。
内面的にも読めるでしょう。」
P「心が暗かった。」
P「空襲があるかもしれないと思っ
て、家族がみんな不安になってい
た。だから家の中の雰囲気は暗か
った。」
：というふうには、「書かれている
言葉」から「書かれていない内容」
を読み取ってゆく。すると作品を深
く読み解くことができる。そして授
業が成立する。この過程は、推理小
説を読むようにスリリングである。
助言をうまく打てば、生徒たちか
ら多様な読みを引き出すことができ
ることもわかった。
その一例を紹介したい。
T「冒頭の『妹よ』という呼びかけ
には、複数の裏の意味が隠されて



うす暗いホールの通路を抜けるとそこにはトンネルが。お化粧の入り口のような雰囲気が漂い、トンネルの中へ入れと招かれる。立っては歩けないほどの狭い道をかがみながら時には四つん這いになって一本道を進む…。と、ざわざわとした風が。いや風ではなく、それは話し声。その先には!

パーッとまぶしい照明に照らされ驚くとそこは大ホールのステージ! 我に返って周りを見渡し、舞台を降りる。空いている席に着いてほっと一息。このドキドキする感覚に子どもたちは何度もトンネルに挑戦する。

「猫道」と名付けた、トンネルのような一風変わった通路から入場するという趣向の今公演、開場前には入場者に猫のフェイスペインティングも行い、猫になった親子のにぎやかな姿があちこちで見られました。

子どもたちの即興のお題に応える「読み猫」の朗読や、笑いの絶えない「マイム猫」のパントマイム、「ジャズ猫」の一流のピアノなど、飽きさせることのないステージが展開していきました。朗読で感激、パントマイムで笑い、ジャズピアノでしっとり。中身の濃い内容におとも子どももみんなが満足した公演になったようでした。



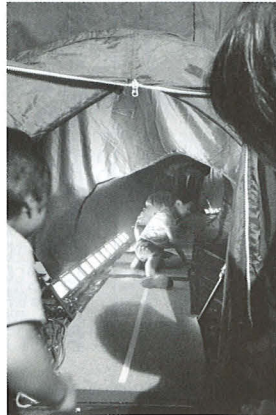
京ことばで綴る
源氏物語
「若紫」の巻

10月2日(金)
かるぼーと小ホール

今から百年ほど前の京ことばで訳された源氏物語を女優の山下智子さんが語る「京ことばで綴る源氏物語『若紫』の巻」を開催しました。

標準語訳では原典の持つ微妙なニュアンスが失われがちなのに対し、京ことばで語られることによってその優美な世界が直接聞く人に伝わってきました。平安の世でもこのような形で物語が紡がれていたのではないかなと思わせる、とても雅で雰囲気のある舞台となりました。

また第一部の解説では、人の心情と自然などを重ね合わせることを「かさね」として、物語の持つ重層的な表現を解き明かし、作品を味わう上で大変参考になったと好評でした。



9月19日(土)かるぼーと大ホール
月猫えほん音楽会
2009

nBoxは築百年の納屋を改装したギャラリーです。造形作家・都築房子の主導により、現代美術を念頭に置いたグループ展を企画・開催しています。

南国市のどかな田園地帯の中にあって、地域に根ざした文化活動を目指しつつ、インターネットによる情報発信も行っています。ふだんは展示を行っていないので物置のようになっていますが、ギャラリースペースの奥は小さなデザイン事務所になっています。

この建物の修理や作業は二〇〇一年の春から少しずつ進められ、二年以上かけて家族で協力しあってやっと完成に至りました。ぼろぼろだった納屋は古いものと新しいもの



11月の企画展「手の仕事展 Vol.5」

11月15日(日)~29日(日)

人の手によって作られた物には、その人の想いが込められています。その大切さを次代に伝えていけるように、様々な手の仕事(木・布・土・紙・金属・ガラス等)を集めて展示・販売いたします。



ギャラリー nBox
南国市立田 1855
電話 088-863-7598
営業時間 11時~18時
(不定休)



が一体となった空間へ生まれ変わりました。外観はこげれいな倉庫のような感じですが、中は昔の太いはりや黄白色の和紙を貼った壁が特徴的です。

蚕が飼われていた二階にはしごで上がると、気持ちのよい小部屋へ続きます。出品物の種類や数によっては、二階にも展示することがあります。

二〇〇三年五月にオープニング企画展として「アーティスト・ブック展」を開催して以来、一年に五、六回ほど企画展を行っています。これまでに三十一回の展示会を開催してきました。

早春におひなさまをイメージした

「おひなさま展」、五月に「本」の作品が集まる「アーティスト・ブック展」、夏には「ポストカードとTシャツアート展」、秋には「手の仕事展」と、ここ数年ではこの四つが定例の展示会となっています。とくにnBoxの誕生とともに始まった「アーティスト・ブック展」は七回を数えました。

これらに加えて若い作家の方々に応援するために、三月と九月の頃にテーマを決めて数人の作家の方に依頼して企画展示を行っています。

nBoxの「n」は数学で使われる任意の自然数のように様々な可能性をもつように、との思いから付けられました。これからもその可能性を追求していきたいと思っています。

(つづきたろう/nBox企画室)

わいわい!ごごし音楽会

家族みんなでわいわい楽しめる、
かるぽーとがお贈りする素敵な音楽会!

演奏 高知交響楽団
歌とおはなし う〜み

12月20日(日) 13:30 開場 14:00 開演
高知市文化プラザ 大ホール

入場料:一般(中学生以上)=1,000円 子ども(小学生以下)=500円 ※3才未満入場無料
お問い合わせ:財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071

風俗

秋桜と溝蕎麦

な「お祭り」を楽しんでいるのだから目を
つらつら。
考えてみれば秋のコスモスだけでなく
春は桜の「お花見」に「菜の花まつり」、
夏には「向日葵まつり」などもあるよう
だから。なにこにつけ、群れ寄り集ま
って「お祭り」騒ぎが好きなのであろう。

四人で連れだつて、国道脇の一面のコ
スモス畑を見に行った。「コスモスマつ
り」の横断幕、子ども連れやアベック、
お年寄りなどで賑わっていて、人出を当
てにして何十軒も出店している。そんな
「コスモス畑」の光景に違和感を抱いて
しまわないでもないが、せっかく観光的

が、やはりこの違和感はどうしようもな
い。コスモスは庭の隅や道路脇でひっそ
りと風になびいているのを、独り物思い
に耽りながら眺めているくらいがちょう
どいいのではないか。
たらくくコスモスの花を満喫した帰り
に喫茶店でお茶を飲むことにしたが、
その傍に「溝蕎麦」という、小さなコン
ペイ糖のようなピンクの花をつけた雑草
を見つけた。清楚なはずのコスモスは、
辺り一面に群れ咲いて、可憐さを奪われ
てしまったようだ。が、「溝蕎麦」のひそ
やかさには秋の風情を感じさせてもらっ
た。
秋になると人はなぜか物悲しくなる。
それにはコスモスがちょうどいいのだろ
うが、こども「お祭り」化されてしまっ
と、「コスモス」の名を口にするこどもさ
え憚られる。いまはもう「溝蕎麦」がす
っかり気に入っている。自分の秋の感情
に合っている(秋)に思ふ。
(稗)

World Music Night

vol.4
formal

～世界の音楽と料理を楽しむ夕べ～

「国際的な音楽交流を中心に高知を楽
しくするプロジェクト」がお届けする、
世界の音楽と食べ物とを一度に楽しめる人
気プログラムの第4弾!!

今回はアメリカから来日する女性ジャ
ズシンガー、イーデン・アトウッドをメ
インアクトに素敵な演奏をお届けします。

世界の料理コーナーも少しムーディーに、
ワインやウイスキーに合う世界のオード
ブルをご用意します。

今宵は少しオシャレして、素敵な音楽と、
美味しいお酒を楽しみませんか!

12月1日(火) 18:00開場 18:30開演
高知市文化プラザ 小ホール
全席自由
前売り2,000円(当日2,500円)
※フード・ドリンク別
お問い合わせ (財)高知市文化振興事業団
088-883-5071

今号の表紙

「アムステルダムの郊外の家」 谷 是

一昨年オランダ、ベルギーを訪れ、アム
ステルダム、ブルージュ、ケント、ブリュ
ッセルなどを廻りました。

この絵は早朝に起き、ホテルの周辺の農
家をスケッチして描いたものです。素朴な
たたずまいと、かつてのオランダと日本と
の交流を思いながら描いたもので、何か親
近感に満ちたひとときでした。

(たにただし)



高知を撮る
第25回写真コンテスト入賞作品

日活劇場
(昭和40年頃 高知市)

横山 正富

現在のおびざんロード。

吉本ばななの「キッチン」という小
説が話題になったことがある。その中
で若いヒロインが、台所がこの世で
一番好きな場所だと語っている。ほんの
一昔前まで、そこはたしかに愛情豊か
な料理がつくられ、家族が集う団欒
の場だった。今もそうだろうか。その
詮索は別にして、今は段とシステム
化されて、飽食の時
代を賛歌するものにな
っていることは確
かだ。
その一方で、立派な
キッチンはあるが「包
丁」や「まな板」のな
い家もあるという。
買えないのではない。
使わないからいらな
いというのだ。冷凍
食品やレトルト食品、
持ち帰り惣菜、弁当
などの調理済み食品
つまり「中食(なかし
ょく)」が増加したため、家庭ではせ
いぜい電子レンジでチンすれば済み、
包丁、まな板がなくても不自由な
いというのだ。やがてキッチンは、床
の間と同じように飾り物的機能のも
のになってしまうのか。「お袋の味」
が完全に死語化されるのも遠くない
気がする。

「包丁」と「まな板」 のない家



風俗歳時記

フード・マーケティング・インスティ
テュート会長のT・M・ハモンズが言い
出したものらしいが、「ハモンズの法則」
とかがあり、それによると「すべ
ての世代は、食事にかける時間を、そ
の前の世代の半分にしていく」という
買い物から、下ごしらえ、調理、盛り
付けと、アメリカで二十世紀のはじめ
は全部で四時間か
けていたものが、二十
世紀後半には十五
分に短縮されている
そうだ。手取り早
くいへば手抜きである。
日本も状況はあまり
変わらないのだが、
もう料理は心をこめ
てつくる時代ではな
いのか。
気がかりなことは
ほかにある。飽食
だのグルメだなどと、
美食礼賛がつく中で、
朝食をまともに食べない小学生や中
学生が増えていることだ。大人の部
もその中に入るのかもしれない。個
人的な事情もあつてのことだ。極論は
避けなければならぬが、食の豊か
さとは何なのかを、真剣に問い直すべ
きところになってきているのではないか。
(稗)

佐竹龍蔵展



第4回 *Concours des Tableaux* 企画展

2009.12.15(火)～20(日)

高知市文化プラザ かるぽーと

7階・第5展示室 入場無料
am9:00～pm7:00(最終日pm5:00まで)

主催:(財)高知市文化振興事業団・文化庁 お問い合わせ:〒780-8529 高知市九反田2-1 TEL:088-883-5071 FAX:088-883-5069

第5回美術作品コンクール

CONCOURS des Tableaux

高知市文化プラザでは、若手の美術作家を支援するために、美術作品コンクールを開催します。これは、芸術文化を創造する人材を積極的に支援・育成することを目的とする事業です。フレッシュな感性、情熱あふれる作品をお待ちしています。

●申込締切

平成22年1月6日(水)17:00
(12月28日～1月4日及び月曜日は休館日)

●審査員

小山登美夫氏(ギャラリスト)

●資格

県内在住あるいは県出身者で18歳以上35歳未満の個人(平成22年4月1日現在)。

●対象

平面作品(壁にかけられるもの)。書、写真は対象外。

●規格 260cm×260cm(枠・額を含む)以内の作品2点まで出品可(未発表作品に限る)。

枠装、額装あるいは容易にワイヤー・フック等で壁面展示可能なもの(ガラス・アクリルの使用不可)。出品料無料。

※1) 展示作品の天災、不可抗力、いたずら等による損害について主催者は責任を負えません。

※2) 作品に水、生花等生ものの使用を禁止します。

※3) 枠装、額装などに不備のある作品は、受付できない場合があります。

※4) 展示後の作品は、加筆、撤去、配置替え等を行わないことを原則にします。

●日程

作品搬入: 1月16日(土)・17日(日)9:00～17:00
一般鑑賞: 1月19日(火)～24日(日)

高知市文化プラザかるぽーと 第1・第2展示室
公開審査: 1月24日(日)14:00～16:00(表彰式16:00～)

●賞

最優秀作1点賞金30万円、優秀作2点賞金各5万円。

また、最優秀受賞アーティストは、受賞後概ね1年以内に市民ギャラリーにて、(財)高知市文化振興事業団主催の企画展を開催することができるものとします。

●応募方法

所定の申込用紙に必要事項を記入の上、作品の写真(制作中のものでも可)を添付し、1月6日(水)17:00までにお申し込み下さい(郵送・持参いずれも可)。これ以後も搬入日まで受付を行います。その場合には展示場所・目録掲載等に十分配慮できない場合があります。1月16日(土)・17日(日)いずれも17:00までに作品をかるぽーと7階市民ギャラリー第2展示室に搬入下さい。

●お申し込み・お問い合わせ先

〒780-8529 高知市九反田2-1
(財)高知市文化振興事業団「美術作品コンクール」係
TEL 088-883-5071